

〈翻訳〉

## P.B. シェリーの書簡集

1818年1月31日—4月20日

加藤 芳子

369番

ウィリアム・ウィラッツ氏<sup>1</sup>宛て

ロンドンにて、1818年1月31日。

拝啓

貴兄は私に、担保として一定額のお金を貸して下さい、私に生命保険をかけても下さいました。その保険証書は、もし私が、貴方に予告をせずにイギリスを離れたら無効になるという事なので、もし貴方がその方がいいとお思いになるのであれば、貴方の保険料を増額して頂いても結構です。私は、故意に、貴方に十分な事前予告をせずに、イギリスを離れる事はしないという事を、ここで貴方にお約束致します。

あなたの忠実な下僕

パーシー・ビッシュ・シェリー

証人：クレメンツ・イン、ウィリアム・リチャードソン。

フォア・ストリート、ジョージ・アダムズ。

クレメンツ・イン、ウィリアム・リチャードソン付き書記、

トーマス・ディナム

<sup>1</sup> この手紙のサインと日付の部分のみが、シェリーの直筆となっている。

ダウデン教授が出版したメアリー・シェリーの日記中の引用（『シェリー伝』、第2巻、183～4頁）によると、シェリーは2月7日にマーロウを出発してロンドンに向かったようである。クレアは9日に、ウィリーとアレーグラを連れて後を追った。メアリーはその翌日に出発した。シェリーのイギリスでの最後の日々は、ハントやホッグ、ピーコックとホレイス・スミスという、愉快的仲間達と過ごした。シェリーは、〔ロンドンの〕ブルームズベリーのグレイト・ラッセル・ストリート119番地に宿をとった。メアリー・ラムが訪問者だった。彼はまた、キーツやノヴェーロ、バクスターやゴッドウィンにも会った。それから彼は、劇場やオペラにも出かけた。ピーコックは、「僕が彼に会ったのは3月10日の火曜日が最後だ。それは、忘れられない夜だった。というのは、イギリスでロッシーニのオペラが初めて上演され、そして、マリブランの父のガルシアがここに初めて登場した夜だったからだ。彼は『セヴィーリアの理髪師』の中で、アルマヴィーヴァ伯爵の役を演じた。フィオードルはロッシーナ役、ナルディはフィガロ役、アンプロジェッティはバルトロ役、そしてアングリサーニはバシーリオの役を演じた。私はオペラの後、シェリーとその旅行の同行者達と夕食を共にした。彼らは翌朝早く出発していった。」

イギリスを去る2日前の3月9日、メアリーは日記に、「子供達に洗礼」と書いている。セント・ジャイルズ・イン・ザ・フィールズ教会の記録には、パーシー・ビッシュ・シェリー殿とバッキンガム州グレイト・マーロウ出身（のち、〔ロンドンの〕グレイト・ラッセル・ストリートに転居）の、その妻メアリー・ウォルストンクラフトとの子供、ウィリアム及びクララ・エヴェリーナの洗礼の事実が残っている。第一子は、1816年1月24日、第二子は、1817年9月2日出生。また、住所不定で大陸を旅行中の貴族ジョージ・ゴードン・バイロン卿と、クララ・メアリー・ジェイン・クレアモントとの娘と言われている、1817年1月17日出生のクララ・アレーグラも洗礼。式を司った聖職者は、チャールズ・マッカーシーであった。

### 370 番

#### ロンドン、ブルックス社宛て

1818年3月22日、

ドーヴァーにて。

拝啓

私の不在中には、以下の方々以外、いかなる請求書にも支払いをなさらないようにお願い致します。

P.B. シェリーの書簡集 (加藤芳子)

ピーコック氏 .....30 ポンド — 15日.  
ゴッドウィン氏 .....150 ポンド — 1カ月.  
オリアー氏 .....30 ポンド — 同上.  
マドックス氏 (マーロウでの支払分として) .....117 ポンド — 4カ月.

もし、それ以外の請求書が支払うべく提出された場合には、支払いは拒否して下さるようお願い致します。というのは、その請求書には、支払う事になっているはずの、イギリス在住の私の友人達との、条件つき契約があるからです。

あなたの最も忠実な下僕であることを誇りに思っております、  
パーシー・ビッシュ・シェリー

[宛て先]

ロンドン、チャンサリー・レイン、  
バンカーズ、  
ブルックス社 御中

[消印]

ドーヴァー

72

13 3月 13

1818年

XIV

1818年3月13日～11月10日

初期のイタリアの印象

「ロザリンドとヘレン」

371番

ロンドンにいるリー・ハント宛て

カレーにて<sup>1</sup>

1818年3月13日。

[金曜日]

親愛なる友へ

しけてはいましたがとても短い航海の後、私達は〔フランスの〕カレーに到着し、目下のところ前進している最中です。私達は皆とても元気で、素晴らしい気分です。憂鬱になる原因がある事が分かっている時でさえも、運動というものは、血液に対して必ず、このように良い影響を与えるものです。

テイラーとヘッシー [スペリングに誤りあり]<sup>2</sup>に関しては、彼らのうちの一人が、20ポンドで自分の著作権を譲っても良いと言っていた事、そして、譲る代わりにそれが支払われるまでは、『リミニ物語』からあがる利益を受け取りたいと言っていた事を、必要とあらば、私は法廷で証言する用意があります。

あなたの永遠に愛する

P.B. シェリー

ミラーノへお手紙ください。

[以下は、メアリー・シェリー筆]

シェリーは今、仕事づくめなので、私達が無事だという知らせを、私に大急ぎで書いて欲しいと言っております。子供達はみんな上機嫌で、とても元気です。私達の航海は嵐に見舞われましたが、それもとても短いものでした。アルバもウィリアムも具合が悪かったのですが、二人とも元気になって、ずっと眠っておりました。私達はいまイタリアへ向けて出発致しますが、とても良いお天気で、希望に胸をふくらませております。

さようなら、親愛なる友よ、お幸せに。

あなたの親愛なる友

メアリー W. S.

[宛て先]

アングレテール [伝語で英国の意]

ロンドン市、パディントン

リットン・グローヴ・ノース 13 番地

リー・ハント氏へ

- <sup>1</sup> メアリー・シェリーの日記によると、彼らは3月12日にカレーに到着し、翌日出発、ドゥーエ、ラ・フェール、ランス、ディズイエ、ラングル、ディジョン、マコンをへて、21日土曜日の11時半にリヨンに到着した。翌日シェリーは、「クレアとの文通を拒んでいた」パイロンに手紙を書き、「アレーグラがこんなに遠くまでやって来ている事を伝えた。」（ダウデン著『シェリー伝』、第2巻、108頁。）25日に彼らはリヨンを後にした。
- <sup>2</sup> リー・ハントは依然として財政困難に陥っていた。ハントは、まだ制作していない新しい

かったのですか<sup>1</sup>。私は、貴方がした事はどちらかと言うと、思いやりがあるようでない仕打ちだったと思っています。しかし、私達が600マイルも離れているという事に免じて、許してあげましょう。

私達は、春に向かって旅してきました。春は、私達に会うために、南から急いでやって来ました。最初は悪天候でしたが、今は暖かく晴天続きで、微風が吹き、いままで見た事もないような深い紺碧の雲一つない空が広がっています。今日のこの暑さは、真夏のロンドンのようです。私の精神や健康は、その変化に同調しています。実のところ、ロンドンを発つ前、私の精神は私の健康状態と同じくらい弱っていたので、私は何とかしたいと思ってはいましたが、そうする事は難しいことでした。

あなたの「詩集…」<sup>2</sup>は読ませて頂きましたが、そのほとんどは私が既に知っていたものですね。「ニンフ」という詩は、何と素晴らしいのでしょうか。特に第二部なんて。それは、強烈で勢いがある点で、実に詩的です。もし私達が600マイルも離れていなければ、glib<sup>3</sup>という言葉が省かれていないとか、その詩は美しいけれども、欠点が無いわけではないのは残念だと言うところです。しかし私は、貴方が次に書く詩を台無しにするといけないので、この問題に関しては口を出さない事にしておきましょう。

マリアンヌと彼女の妹へ、よろしくお伝え下さい。そしてマリアンヌには、彼女が帰っていく時に、私を起こさないようにしてキスを奪っていったのですねと伝えて下さい。そして私には、キスのお返しをする良い方法が思い当たらないので、この事態を有効に使って、貴方にこの借りを返して下さいようお願いしなければなりません。一体いつになったら、皆様に再びお会いできるのでしょうか。おお、イタリアでお会いできたら良いのに！ 実を言うと、どれだけ長い間離れているのかと考えると、私は大変憂鬱になってしまうのです。それでは、親愛なる友よ、ご機嫌よう。お返事は早急にお願い致します。

永遠に最も親愛なる友

P.B.S. より

リー・ハント殿へ

- <sup>1</sup> シェリーのロンドンでの最後の日である 1818 年 3 月 10 日火曜日は、グレイト・ラッセル・ストリート 119 番地の宿で、リー・ハントとその妻と共に過ごした。メアリーが日記に付け加えている。「メアリー・ラムの訪問、パパ夕方来る。お別れ。」夕方シェリーは眠りにつくが、目をさますことはなかった。それで彼の友人達は、あいさつをせずに帰っていったのである。
- <sup>2</sup> 『詩集：オリジナルと翻訳』。リー・ハント著。1818 年、オリアー社より出版。その中に、「パーシー・シェリーへ」という詩が含まれている。
- <sup>3</sup> 『ニンフ』の第 1 部の最後のほうの “the glib sea-flowers” という句の中にある。

### 373 番

#### 日記：エッシェールの旅

[1818 年]、3 月 26 日、木曜日。

私達は、山脈へ向かって旅をし、アルプス山脈の渓谷に入り始めています。このあたりの田園には再び、新緑と耕された畑、白亜の城、そして樅やクルミの古木の間には、小さな家が点々と広がっています。特にここのブドウ畑は絵のように美しい。ブドウの木は莫大な数の格子垣で囲んであり、その幹には苔がむし、年輪を重ねて、灰白色の葉をつけています。低く地をはうように生えていくフランスのブドウの木とは違って、ここのブドウは、絡み合った木の葉が列を成し、そして葉が青々として、赤いブドウが灰白色の枝の間に実る頃ともなると、根元の苔の上に腰掛けた人々に、心地よい木陰となっています。ブドウの木は、ある時は開けた耕地に植えられ、ある時はりんごや梨などの背の高い果樹園の間に植えられています。そして、木々の小枝は一斉にほころんで、今まさに紫色に染まりつつあります。

私達は、フランスとサヴォイの国境にある、同名の山のふもとの村レ・ゼッシェールで夕食をとりました。その前に私達はポール・ボンヴォアサンに滞在

しました。そこは、フランスとサルデーニアの領土の境界線があるところです。ここレ・ゼッシェールで私達は、二、三日前、一人のミラーノ人が、そのパスポートがサルデーニアの領事に認められなかったために、はるばるリヨンまで強制送還されてしまったという事と、私達も同様の扱いを受ける事になるかもしれないという事を耳にしました。私達はイギリス人であるせいなのか、入国許可をもらうのに苦労しました。さんざん議論をしたあげく、私達の書物は、検閲官に提出するためにシャンベリーに送られてしまいました。その検閲官は、サルデーニア王の領土内では、ルソーやヴォルテールなどの啓蒙思想家は一切認めないという聖職者でした<sup>1</sup>。そのような本はすべて焼却処分されてしまいました。

夕食の後で私達は、1582年にサヴォイ公爵シャルル・エマヌエルが、とてつもなく高い、切り立った岩山を削って造ったくねくねと曲がる道に沿って、レ・ゼッシェール山に登りました。垂直の高さで少なくとも1,000フィートはあるその岩山には、ところどころ道の両側に突き出ている所があるので、空はほとんど見えません。このあたりの景色は、アイスキュロスの『プロメテウス』の中で描写されている景色に似ています。花崗岩の絶壁にある大きな割れ目と洞窟、氷と雪をいただいた寒々しい山々、洞窟の中で聞こえる目に見えない流れの大音響、そして今にも落ちそうにぐらつく岩壁、これらは、アイスキュロスが描いたように、海のニンフの翼のある馬車でもって、初めて計られるようなスケールの大きさなのです。

この暴君の圧政のもとで、これらの山々が境界となっている肥沃な谷に住む人々は、大変恐ろしい貧困と病気による混乱状態にあります。この登山道の入り口あたりでは、住民たちの苦難の物語が岩山のあちこちに刻み込まれていて、旅人たちの同情を誘っていました。足が不自由で目も見えない老人が、上の方からひっきりなしに流れてくる雪解け水で濡れていて、シャワーのようにその水滴をしたたらせている、岩山の洞穴から這い出て来ました。

シャンベリーへと下って行っても、この地方は、依然として美しいままでしたが、これまでよりは少しばかり穏やかな特徴を見せていました。私達は、日



没の少し後に、到着しました。

- <sup>1</sup> 以前、ノーフォーク公爵のところ、サー・ティモシー・シェリーに会った事のある司教座聖堂参事会員が、たまたま検閲に立ち会っていたので、それらの本は検閲を通過したのである。——ダウデン教授著『シェリー伝』、第2巻、189頁より。

### 374 番

#### トーマス・ラヴ・ピーコック 宛て

ミラーノにて

1818年4月。

親愛なるピーコック殿

私達はようやく旅の目的地に到着しました——つまり、ほんの数マイル手前のところに着いているのです——というのは、私達は今年の夏は、コモ湖の湖畔で過ごそうと予定しているのです。私達の旅は、氷点下の寒さのせいで幾分つらく、アルプス山脈を越えるまでは、他に例をみないほど楽しくないものでした。もちろん、アルプス山脈自体は別ですが。しかし、私達がイタリアに到着するや否や、大地の美しさや空のうららかなさは、私の感覚に、これまでになく大きな新しい感情を呼び起こしました——そして私は、一生これらのものを賞賛してゆきます。なぜなら、祖国 [英国] の都会の煤煙や、人々の喧騒、冷え冷えと立ち込める霧や雨の中にいると、私は生きた心地がしないからです。私はフランス人のあの鼻にかかった、そして短縮された不快な音調を聞いた後で、スーザの町でアウグストゥスの凱旋門の見学の案内をしてくれた女性が、その半分は私には理解できなかったのですが、はっきりと完璧なイタリアの言語を話すのを聞いて、どんなに嬉しかった事でしょう！ すみれと桜草の生い茂った、緑の芝生の道のようなところに、そして巨大な山麓の中央に建っている、ギリシア風の壮大な門の遺跡と、フセーリの『夕暮れ』の絵の様式に似

た、快活で優美なふるまいの金髪の女性とが、私達がイタリアで目にした最初のものでした。

この町は大変感じの良いところです。私達は、昨夜オペラを見に行きました——それはとても素晴らしい公演でした。オペラ自体は好ましくはありませんでしたし、歌手達は私達イギリスのオペラ歌手よりもかなり劣っていました。しかし、バレエ、あるいはむしろ一種のメロドラマないしはパントマイムは、私が今まで見た中で最も素晴らしい光景でした。ここには、ミス・ミラニー [原文のまま]<sup>1</sup> はいませんでした——どう考えても、ミラーノのほうが間違いなく優れています。言葉が身振り手振りに変えられる方法と、問題となっている物語を説明するときの全体的な完璧な効果と、各役者のよそよそしくない個人的魅力は、子供に対してさえ、この合唱劇を私が想像できないぐらい印象の強いものにしていました。この物語は、『オセロー』です。そして、こういうのはおかしいのですが、それは不快な印象を残しませんでした。

私は手紙を書いておりますが、今は書く気がしないのです。貴方は、すぐにこれ以上愉快ではないにしても、もっと長い手紙を期待しているに違いありません——一週間後位に——その頃になれば私も旅の疲れから回復しているでしょう。イギリスの乳母のもとに残してきた私達の子供の消息を全部教えてください。もちろん、私達の友人の事もです。コベット [ウィリアム・コベット：1763-1835] や政治の事についても少し触れて下さい——そしてハントについても——彼には今メアリーが手紙を書いています。そして、特に貴方自身の計画と貴方自身についても——そして、マリアーメ [マリアンヌ、ハントの妻、スプリング誤り] についても触れて下さい。すぐに私や私の計画についてもっとお知らせしましょう。私の健康はすでに良くなっています——そして私の精神もいくらかは——そして私にはたくさんの文学的な計画があり、とりわけ一つは——私はこれにとりかかって片付けたいのです。私は改訂用に、紙を少し貴方に送るよう、オリアーに注文しました。

さようなら。——いつも貴方の忠実な友、

メアリーとクレアがよろしくと言っております。

[宛て先]

トーマス・ピーコック殿

グレイト・マーロウ市

バッキンガム州

アングレテール [仏語で英国の意]

インギルテラ [伊語で英国の意]

[消印]

F.P.O.

4月23日

1818年

<sup>1</sup> ピーコック氏は1817年のシーズン中に、シェリーを説得して、彼と一緒にオペラに同行させたと言っている。「その公演は『ドン・ジョヴァンニ』だった……その後にはミラニー嬢が主役のバレエが引き続き公演された。シェリーはこの女性に魅せられ、これまでそのような優美なしぐさを想像した事がない、そしてこの印象は永久だと、言った。」

### 375 番

### バイロン卿宛て

(ホテル・レアール) ミラーノにて

1818年4月13日。

親愛なるバイロン卿殿

私は、私がリヨンからお送りした手紙を、貴方が受け取られたのかどうかを確かめるために、今この手紙を書いております。<sup>1</sup> それから、貴方の愛するお

嬢様が、心身ともに非常に良好で当地に着かれた事、そして私達の頭上に広がる空の様に青い目をしていらっしゃる事も、重ねて御報告申し上げます。

メアリーと私は、たったいまコモ湖から戻って参りました。当地で私達は、この夏を過ごすための家を探しているのです。もし貴方がこの壮大で素晴らしい土地を訪れていらっしゃらないのなら、この土地は貴方が苦勞して御覧になるかがあるだろうと私は思います。この夏は、私達と一緒に二、三週間過ごされませんか？ 私達の生活様式はあい変わらずで、貴方がジュネーヴで覚えていらっしゃるようなものであり、そして私達が選んだ場所（プリニアーナ邸）は人里離れた所で、驚くべき雄大な風景に囲まれ、足元には湖が広がっています。貴方がもし私達を訪ねて下さったなら——これほど歓迎する所が他にありませんか——幼ないアレーグラ嬢は貴方と一緒に戻られるかもしれませんね。

メアリーもくれぐれもよろしくと申しております。そしてクレアは、今年の冬に彼女が送ったアレーグラの毛髪を、貴方が受け取って下さったのかどうかを尋ねてくれるよう私に頼んでおります。

貴方の誠実なる友

P.B. シェリー。

追伸 貴方に差し上げるために本を数冊、私の大きな箱の底に詰め込んで参りました。ヴェネーツィアの方へお送り致しましょうか。

私は、リヨンから出した私の手紙がどうしてそちらに届かなかったのか、見当もつきません。

<sup>1</sup> この手紙は、見つかっていない。

376 番

トーマス・ラヴ・ピーコック宛て

ミラーノにて

1818年4月20日。

親愛なるピーコック殿

私達の間隔たりが、手紙に関して時間で測ったなら、こんなに大きいとは見当もつきませんでした。私はついこの間、2日付の貴方の手紙を受け取ったばかりです——そして、私がこの町でその直後ぐらいに書いた手紙を、貴方がいつ受け取る事になるのか、私にはわかりません。私は、貴方がマーロウ〔英国〕にずっと滞在せざるを得なかったと聞いて、残念に思っています。多少の付き合いは人生には欠かせないものですからね。特にこの夏イタリアで、私達は貴方にお会いできないようですし。でも私は、こういう事は、なるようにしかならないと思っています。私は、心の中では、何度もマーロウを訪れているのですよ。この世で嫌な事は、ひとたび知ったら、知らないとは言えないという事です。貴方は仮にある所に住んでいるとします。そこは、貴方が住む前は、この世の他の土地と同様に、貴方にとっては知らない所です。なのに、何かの必要性に駆られて、貴方がそこを去ろうと思っても、貴方はそこを去る事ができないのです。なぜかという、その土地の事は、貴方につきまとい、貴方はそれを経験している時には、そんな素振りも見せなかったのに、その土地の思い出は、貴方がその土地を捨てた事に対して復讐するものなのです。時はどんどん流れていきます。人の住む土地は変わっていきます。私達と一緒にいた友達は、もう一緒にはいられません。しかし、過ぎ去った過去は、まだ存在しているようには見えるが、今はなく、死滅しているのです。そういうことで、私は、『悪夢寺院』の研究書を貴方にお送りしました。

私が貴方にこの間手紙を書いた後、私達は、家を探しにコモ湖へ行っていました。ここの湖は、美しさにおいて、今まで私が見てきたいかなるものをもし

のいでいます。但し、キラニー [アイルランド] のツツジの島々を除けばの話ですけれども。この湖は細長くて幅が狭く、まるで大きな川が山々や森林の間を曲がりくねって流れているように見えます。私達はコモの町から船で、トレメツィーナと呼ばれる広い地域へでかけました。そして、湖の、そのあたりの地域が見せてくれるいろいろな景色を見ました。コモとこの村 [トレメツィーナ]、または村落の間にある山々は、頂上のほうは、栗の木林 (この国の住人が食物のない時に食べて生きながらえる、食用の栗の木) で覆われています。そしてその林は、ところどころで、白い枝をつけ、湖の [スペリングに誤りあり] まさに岸辺の所にまで下りてきて、湖の上に張り出しています。しかし、たいていこの湖岸のすぐそばのあたりは、月桂樹や、ギンバイカや、野生のイチジクの木や、岩の裂け目に生えて、洞窟の上にかかり、滝のきらめく光で満ちた深い峡谷を陰で暗くするオリーブの木が繁茂しています。そこには、他に、名前も知らない低木も花をつけています。高いところでは、村の教会の塔が、暗い森林の中に白く見えます。南に面している向こう岸では、さほどきつくない勾配で山並みが湖まで下りています。しかしその山々は、周囲の山よりひとときわ高く、一部は万年雪に覆われていて、その山々と湖との間には、比較的低い一連の丘陵があって、その丘陵には、峡谷や裂け目が次々と連なり、私がイダ山やパルナツソス山 [ギリシア] の裂け目を思い浮かべてしまうほどのものなのです。ここには、オリーブやオレンジ、レモンなどの農園があります。それらは今、実をたわわにつけていて、葉の数よりも実のほうが多いほどです——そして、ぶどう畑もあります。この湖のこちら側は、ひとつのつながった村があり、ミラーノの貴族たちは、ここに大きな別荘を構えています。文化と、耕されていない豊かさと、自然美の融合が、ここでは大変緊密なので、それらを隔てている境界線を見つけるのは、ほとんど不可能です。しかし、最も見事な景色はプリニアーナ邸宅のもので、名前の由来となった泉は邸宅の中庭にあり、小プリニウスが描いたように、三時間おきに満ち引きします。私達は、一時は壮大な宮殿だったことがあり、今は半ば廃墟と化しているこの家を、手に入れようと努力しています。その家は、湖の底からそびえ立つ

ような台地に建っていて、庭付きで、半円形の絶壁のふもとにあり、うっそうとした栗の木林で日光がさえぎられています。柱廊から見た景色は、私が今まで眺めた景色の中で、最も驚嘆すべきものであり、同時に、最も美しいものでもあります。一方には山があり、また、君の頭上には、空に突き刺さるかと思うほど恐ろしく高い糸杉の木がたくさん生えています。頭上からは、とてつもなく大きな滝が、まるで雲の間からのごとく、木が生い茂っている岩場に砕かれ、千の流れとなって、湖に流れ落ちていきます。他方には、青々と広がる湖と山並みが見えて、白い帆や若い木の芽の色と良いコントラストを見せています。プリニアーナという邸宅はとても大きいのですが、ろくな家具が付いておらず、しかも旧式のもので、湖が見渡せ、ピュティアという呼び名に値するほど巨大な月桂樹の影の下へと続いている台地は、大変気に入っています。私達はコモに2日間滞在して、今ミラーノに戻り、家についての私達の交渉の結果を待っているところです。コモはミラーノからわずか6リーグ〔約18マイル〕しか離れておらず、その山々は〔ミラーノの〕大聖堂からも見えます。この大聖堂は、実に驚くべき芸術作品です。それは、白い大理石で建てられ、途方もない高さの小尖塔に刻まれていて、そしてそれは最高に繊細な職人芸であり、その建物全体が彫刻で埋めつくされています。この大聖堂が、その沢山のきらめく尖塔で真っ青な空を突き刺しているという印象、または厳かで深みのあるこのイタリアの青空や、もしくは沢山の尖塔のシルエットのすき間に星が見えるような時の月光にくっきりと浮び上がっている大聖堂の印象というものは、人間に造ることができるかと私が想像できる、あらゆる建築様式をはるかに超えるものです。内部はと言うと、非常に荘厳ではありますが、実に世俗的な特徴を持っていて、ステンドグラスや、古風な彫刻が過度なまでに施された重厚な御影石の円柱があり、真鍮の聖餐台のそばの、黒い布の天蓋と、丸天井の大理石製の雷文細工の下で、絶えることなく燃えている銀のランプのおかげで、幾分きらびやかな墓を思わせる様相を呈しています。これらの側廊に囲まれ、聖餐台の背後あたりに、孤立した場所が一カ所あって、そこは、何層にもなっている窓の下では、昼の光でさえも薄暗く陰気なのですが、私はそこを訪

れては、そこでよくダンテを [原書で] 読みました。

私はこの夏を、そして実は来年をも、タッソー [伊の詩人] の狂乱を題材に悲劇作品を執筆するのに充てています<sup>2</sup>。そのタッソーの狂乱と言うのは、私が調べて見ると、適切に扱われたならば、見事に劇的かつ詩的な作品となるはずですが、私には劇の才能がないと貴方は言うでしょう。ある意味では、全くその通りです。でも私は、劇的な才能のない者が、どのような悲劇を書くことが出来るかを見てみようと思心に決めたのです。それは少なくとも、ファツィオ<sup>3</sup>よりはましな道德劇、バートラム<sup>4</sup>よりはましな詩としたい。貴方は、ロードダフネ<sup>5</sup>という本については何も教えてくれないのですね。今だから打ち明けますが、私はこの本には、並々ならぬ成果を期待していたのですよ。

今頃、マーロウの私の家には誰が住んでいるのでしょうか、それとも、それはどう処分される事になるのでしょうか？ その場所は私の健康に有害であったと、私は本気で確信しています。なのに、誰が次にその家の所有者になるのだろうかという事に、こんなにばかげた興味を持っているなんて。ここまでの私達の旅行費用は、かなり相当な額にのぼっています — しかし、私達は、今ここでは、ホテルに滞在しています。これは一種の下宿屋のようなもので、料金に関しては大変手頃です。そして、このホテルに入ると、イタリアご自慢の物価の安さを期待通りに体験できます。私が今まで食した中で、最高の品質で最も白くて最もおいしいパンは、小麦粉からできているのですが、[重さ] 1ポンドでたったのイギリスの1ペニーなのです。生活の必需品は、すべてこれに比例しています。ですが一方では、贅沢品や紅茶などはとても高価です — そして英国人は、相変わらず、事情を良く知らないでいると、実にばかげた方法でだまされてしまいます。私達は [ここでは] 誰一人知っている人はいませんし、昨晚までは、オペラも常に同じものを上演していました。幼いアルバ [バイロンの子] はまだ私達と一緒にいます。でももうすぐ一緒にいる事もなくなるだろうと思います。 — バイロン卿はヴェネツィアに3年間住居を構えているそうですが、私達が彼に会えるかどうかは分かりません。それはある程度



は、私達に彼を招待できるほどの家が手に入るかどうかにかかっているでしょうから。この町を通過する英国人の数は大変多いです。現在のような危機のさなかには、彼らは祖国にいるべきです。彼らの行為は全くもって許し難いものです。ここの人々は、全く悪気はないのですが、どうも心身ともに、貧しい民族のように思えます。男性は、全く男らしくありません。彼らはまるで、頭が鈍く、その上使いものにならない奴隷のやからのように見えますし、私はアルプス山脈を越えてからというもの、男性の顔つきに、知性のきらめきなどみじんも見えていないと思います。奴隷化された国々の女性たちは、常にその男性たちより優れています。ですが、彼女たちは堅く引き締まった表情をしており、男たらしとかまととの混合を示す（おお、フランス人とは何と違う事か）顔つきや、物腰をしています。そんな姿かたちを見ると、私は、英国女性の最悪の特徴を思い出してしまいます。<sup>6</sup>人間性を除けば、ここでは何でもフランスよりもっと完成度が高い。宿の清潔さと快適さは、時には全くイギリスと変わりませんし、田舎は美しく耕作されています。そして要するに、人の世の常として、君が自分の中に、自分の幸福を見つけられさえしたなら、ここは住むのにはとても快適で便利な所です。

さようなら —

メアリーとクレアが心からよろしくと伝えています —

君の親友

P.B.S.

クレアは君にミレーヌ嬢の伝記を書いてくれるようにとお願いしています。

[以下はメアリー筆]

メアリーが貴方に、ピン止めの用紙を少しと、封ろうを数本、ハント夫人のようなブラシを1つと幅3インチで歯が2インチのべっ甲の櫛1つを、真夏に

P.B. シェリーの書簡集 (加藤芳子)

発送予定の小包と一緒に送って下さるよう、お願いしております。

[宛先]

T.L. ピーコック殿

グレイト・マーロウ

バッキンガム州

アングレテール [仏語で英国の意]

[消印]

F.P.O.

5月7日

1818

- 2 『解放されたプロメテウス』に関するコメントの中で、シェリー夫人は次のように語っている。イタリア在住の1年目に、「すべての力とともに、初期の作品のあらゆる美を超える勢いで、夫の心にある詩的精神がよみがえってきた。彼は詩劇の根本として3つの題材を想定していた。その1つがタッソーに関する物語で、これに関しては、タッソーの歌一篇のわずかな断片しか残っていない。もう1つは、ヨブ記に基づいたもので、構想としては彼は決して断念してはいないのだが、それについて彼が書いたという痕跡は、彼の原稿には全く残っていない。3つ目が、『解放されたプロメテウス』であった。
- 3 セント・ポール大聖堂の参事会長ヘンリー・ハート・ミルマン (1791-1868) 作。この悲劇は、1815年コヴェント・ガーデン [ロンドン] で上演された。ピーコックは、シェリーが『ファツィオ』と言う劇の「ビアンカ」役のオニール嬢の演技に夢中なまでに魅了されていたのを覚えている、「そして、シェリーが『チェンチ』の中の「ベアトリーチェ」と言う登場人物を描く際に、オニール嬢が常に彼の頭の中にあつたという事は明白だと私は思う。『ファツィオ』を除いて、私はシェリーが英国の劇場での演技に満足していたのを思い出せない。」と言っていた。
- 4 『バートラム』は、尊師チャールズ・ロバート・マトゥリン作の悲劇で、バイロンの影響を受けており、1816年にロンドンのドルーリー・レーン劇場で上演され、成功を収めた。
- 5 『ロードダフネ、または、テッサリアン・スペル』は、ピーコックの詩で、フッカム社によって1818年に匿名で出版された。シェリーによるこの本の批評は、おそらく彼が英国で行った文筆活動の最後のものだった。メアリーは、「『ロードダフネ』に関するシェリーの批評を筆写する」と、1818年2月20日金曜日付けの彼女の日記に記録している。
- 6 シェリーのイタリア人に関する無知や軽率のうちに形成されたこれらの印象は、イタリアにもっと長期間滞在した後には、すっかり変わってしまった。彼らが、統治者によって入念に守られている無知や、これらの同じ統治者たちが実にうまい原動力として利用している、宗教上の組織によって育まれてきた悪徳を見聞きしているうちに、彼は、この素敵な国民の非凡な知力や才能を、すぐさま発見してしまった。——シェリー夫人の註。

Roger Ingpen (ed.): The Complete Works of  
Percy Bysshe Shelley (New York: Gordian Press, 1965),  
Vol. IX, Letters 1812 to 1818 より